

令和4年度「学術変革領域研究（B）」新規採択研究領域
に係る研究概要・審査結果の所見

領域番号	22B306	領域略称名	嫉妬の科学
研究領域名	嫉妬の理解と創出:生物ロボティクス融合による共生社会のための社会情動の理解		
領域代表者名 (所属等)	笠井 淳司 (大阪大学・薬学研究科・准教授)		

(応募領域の研究概要)

社会生活の中で、個体間格差は無意識に嫉妬を生じさせ、それが共生社会の実現への障害になる。この嫉妬の根底にある自他の認識は、こころの基盤をなす脳の重要な機能であり、その障害は自閉スペクトラム障害や統合失調症などの精神疾患にも関わるとされている。しかし、1世紀以上も様々な研究分野がその仕組みの解明に挑戦してきたが未だに十分な理解には至っておらず、研究戦略のパラダイムシフトが急務である。本領域では、この嫉妬がヒトだけでなく非ヒト霊長類やげっ歯類にも共通する知見を基に、これまでにない神経科学・ロボット工学・計算理論の若手研究者の有機的連携により、この嫉妬生成のメカニズムに迫る。これにより社会的なコミュニケーション能力の根幹を理解し、ヒトのこころを理解するロボットの開発や誰もが相互に尊重し支えあう共生社会の発展に貢献する。

(審査結果の所見)

本研究領域は、これまで科学的に扱われることが少なかった「嫉妬」を神経科学やロボット工学、計算理論などの立場から科学的にその原理を解明しようとする意欲的な研究領域である。研究対象としては、霊長類からげっ歯類、ロボットまで多岐にわたっており、挑戦的な要素の多い研究領域である。研究計画はどれもよく練られており、実現可能性もかなり高いものと考えられる。本研究領域がうまく進めば、学術変革につながる可能性が高く、他の分野への波及効果も十分に生まれるものと予想される。計画研究の研究者の構成は非常にバランスがよく、研究領域内の役割分担もよく考えられ、助言体制もよく考慮されている。学術変革領域研究（A）への発展性も十分にあると考えられる。神経科学、心理学、行動学等に留まらず、文理の枠を超えた多くの学問領域を包含する研究領域の展開が期待される。